

第7回全国「高校文芸誌(及び文芸創作)」コンクールについて

その新しさはどこからくるのか？

選考委員長 村中李衣

梅光学院開学130周年を記念して始められた本コンクールも今年で……という書き出しも今年で7回目となりました。繰り返されることばの意味は繰り返されるたびに変容をとげ、ひとところにとどまらないということを、選考を終えた今実感しています。

今年は、文字通り北は北海道から南は沖縄まで71校74誌4,317作品が寄せられました。雑誌がコンクール事務局に届くたびに、「おっ、きたきた」と、1年ぶりに再会する雑誌に向かって、なつかしい挨拶を交わすような気持ちになったり、初お目見えの雑誌に「ようこそようこそ」と、始めましての握手を求めるような気分になったり、これはやはり、審査員がすべての雑誌と向かい合う選考方法を貫いてきたことによって「1年間という創作時間」の共有意識が育っている証でしょう。

さて、「高校文芸誌」部門の最優秀奨励賞は、筑紫女学園高等学校の「いさらゐ第49号」に、決まりました。去年は、優秀賞でしたが、今年は最高賞。奇しくも創立100周年を記念する特集も組まれていたメモリアルな号での受賞となりました。もちろん、受賞はお祝儀ではなく、例えば「100周年」という時間の、この文芸部独自の取り組み方、編集の仕方を評価してのことです。ただ、気になることがひとつ。高校生文芸道場レポートの中で、「テーマ作品やリレー小説はもはやオリジナリティに欠けるので、どのように新たなジャンルを開拓してゆくか」が課題だと記されていましたが、あくまでも、表現そのものの新しさの追求が大切で、「もはや」なんて時代の後追いをしてジャンルの新しさに傾いていってほしくない。それは、必ずどこかで、受賞向きの(各コンクールの傾向を読み取った)「らしさ」の罫にはまってしまうからです。そういう意味で、優秀奨励賞を受賞された、受賞常連の「響」「瑞木」「帆聲」三誌ともに同じことばを贈りたい。

個人作品部門では、小説部門での健闘が目立ち、短歌・俳句、詩部門での実りが少ないように思われました。結果、最優秀賞に輝いた3作は、全て小説になりました。受賞した「街灯」には、登場人物たちの等身大での「死」の捉え方にはとさせられますし、「蛙」は、逆に、「生」の捉え方に、また、「忘れ物預かり所」は、現実からの遊離の仕方に従来のファンタジーとは異なる文法をみせつけられました。いずれも、すごい表現力です。

最後に、応募いただく雑誌は、あくまでも「文芸部誌」であって、個人歌集や、個人作品集は、本選考の対象とならないことを再度確認して、次なる「やぁ！」の時をまた1年間お待ちすることにいたします。

「高校文芸誌」部門

最優秀奨励賞

文芸誌名	高校名	県名
いさらゐ 第49号	筑紫女学園高等学校	福岡

優秀奨励賞

響 第8号	福岡県立若松高等学校	福岡
瑞木 第六十二号	茨城県立水戸第二高等学校	茨城
帆聲 第六一号	福岡県立八幡高等学校	福岡

佳作

「岬」 四十五号	秋田県立秋田南高等学校	秋田
レセダ 53	山口県立防府高等学校	山口
紫苑 第41号	仙台白百合学園高等学校	宮城
Who's That? vol.27	山口県立華陵高等学校	山口
『煌』 第四号	岩手県立水沢高等学校	岩手

梅光学院大学文芸部賞

鳳翔 第四号	福岡県立三池高等学校	福岡
--------	------------	----

個人作品部門

賞	分類	ペンネーム	作品名	県名	高校名	文芸誌名
最優秀作品 下関市長賞	小説	加藤 晶	街灯	宮城	仙台白百合学園高等学校	紫苑 第41号
最優秀作品 梅光学院長賞	小説	なせなる	蛙	東京	東京都立富士高等学校	ゆりもくば
最優秀作品 佐藤泰正賞	小説	松下実樹	忘れ物預かり所	茨城	茨城県立水戸第二高等学校	瑞木 第六十二号
優秀作品 同窓会賞	小説	小石川彩	LOVE 及び PEACE	福島	福島県立磐城高等学校	磐高文学 第六十四号
優秀作品 同窓会賞	小説	塩原拓人	いつかより穏やかな発酵	岩手	岩手県立水沢高等学校	『煌』 第四号
優秀作品 同窓会賞	小説	塩川 幸	胎内で孵化する卵	大分	大分県立大分上野丘高等学校	青窓 74号
優秀作品 同窓会賞	詩	加賀谷理沙	星空カップリング	宮城	宮城県名取北高等学校	漣 復刊 第2号
優秀作品 同窓会賞	詩	古川仁美	世界の終わり	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第49号
優秀作品 同窓会賞	詩	守宮竜子	無機生物	広島	広島県立広島観音高等学校	海溝 78号
優秀作品 同窓会賞	詩	コズ	もしあたしがのっぽになったら	岡山	岡山県立津山高等学校	成美文芸 55.5号
優秀作品 同窓会賞	詩	羽藤聖美	祖父とソファーのはなし	岩手	岩手県立水沢高等学校	『煌』 第四号
優秀作品 同窓会賞	短歌	堀田隆大	実験工房短歌集	福岡	福岡県立八幡高等学校	帆聲 第六一号
優秀作品 同窓会賞	俳句	大谷晃仁	春愁	福島	福島県立磐城高等学校	磐高文学 第六十四号
佳作	小説	渡邊 謙	井戸浚い	宮城	宮城県名取北高等学校	漣 復刊 第2号
佳作	小説	大賀愛理沙	伝えたい	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第49号
佳作	小説	炎	ファンタスティック・キット	山口	山口県立防府高等学校	レセダ 53
佳作	小説	平岡亮治	焼却炉にクロアゲハチョウ	愛媛	愛媛県立松山南高等学校	「露」 第六十一号
佳作	小説	鳥島鳥	帰郷	広島	広島学院中学・高等学校	言葉遊戯 Vol.5
佳作	小説	三堂季康	丘の上の指揮者～春の章～	大阪	大阪府立夕陽丘高等学校	紫苑 第八号
佳作	小説	azuki	林檎と消防士	群馬	群馬県立中央中等教育学校	UNTITLED
佳作	童話	綱本佑香	きみぼくウサギ	福岡	福岡県立八女高等学校	Eucaly vol.98
佳作	エッセイ	あおぞらいるか	先生の配慮	山口	山口県立華陵高等学校	Who's That ? vol.27
佳作	詩	酒井衣芙紀	透明チャイルド	大分	大分県立大分上野丘高等学校	青窓 74号
佳作	詩	井上法子	夢蟲	福島	福島県立磐城高等学校	磐高文学 第六十四号
佳作	詩	兵頭亜佳音	空色～sky color～	愛媛	愛媛県立松山南高等学校	「露」 第六十一号
佳作	詩	藤野 漣	笑顔	福岡	筑紫女学園高等学校	いさらみ 第49号
佳作	詩	直江兼綱	游游唄	沖縄	沖縄県立那覇高等学校	はっしゅ 第10号
佳作	詩	黒木 唯	猫背	宮崎	宮崎県立宮崎大宮高等学校	空前絶後 21
佳作	詩	有田奈央	泣き虫	福岡	福岡県立若松高等学校	響 第8号
佳作	詩	金子晴香	風車	福岡	福岡県立浮羽究真館高等学校	幸 第二号
佳作	詩	Aya Goto	夕陽のかくれんぼ	宮城	仙台白百合学園高等学校	紫苑 第41号
佳作	詩	早川佳央里	いつもの帰り道	福岡	福岡県立三池高等学校	鳳翔 第四号
佳作	企画	文芸部	第三企画 水戸二喫茶 秋桜	茨城	茨城県立水戸第二高等学校	瑞木 第六十二号

村田喜代子(本学教授 作家)

言葉を紡いで飛び出すもの

今年も小説部門は実りがあった。最優秀賞3作は短編ながら3人の個性がはっきりと現れて、今後どのように成長していくか楽しみである。

加藤晶さんの『街灯』は、作りもテーマも少々変わった小説だった。弟のことを思い出しながら歩いていて、道の途中でその弟の同級生の少年と会う。それから今度は二人で弟のことを思い出していくのである。読むうちに二人の話題の弟が今はもう死んでいることに気づかされる。早死にした弟のエピソードを通して生と死の観念に初めて触れる初々しさが、上質の作品に仕立て上げた。この作者は一場の雰囲気というか情緒をうまく自然に作りあげる力がある。ただ気になる点があるとすれば、弟が一昨日死んだというのは無理がある。葬式の翌日にこういう話ができるだろうか。少なくとも半年前に死んだとか、そういうことにしたほうが自然だ。

松下実樹さんの『忘れ物預かり所』も、うまさの点では甲乙付け難いが、加藤さんが雰囲気なら、松下さんは何につけても考える思考型の人だろう。だから地の文を読んで面白い。雨がぼつりときて天気予報を論じたり、救急車が走りすぎて映画が1本撮れると考えたり。この性質は強みである。さらにストーリーを作る才があり、あれよあれよという間に読者をけむに巻いていく。ラストはこういう終わり方もあったのかと感心した。この人はこれから何でも書いたらいい。この作品の筋の運びの調子の良さは、軽くはない。筆力もある。考えずに書けと言っても、充分考える人だろうから、どんどん書いていくといい。

さて、三つめの、なせなるさんの『蛙』は何といえいいのだろう。奇妙な異物感が残る、しかしただならぬ作品である。おとなの世界の小説でいうと、人間の生と死の循環を不気味に示唆した深沢七郎の『楢山節考』をドンと置かれたような。一見、ぶっきらぼうな小学生のような文体だが、それがこの異様なテーマを幹の太いものにしている。舞台を教室にしぼり蛙だけでストーリーを動かした。水槽の水がしだいに臭くなっていく教室の描き方はじつにうまい。この人は前にどんなものを書いたのだろう。これからどんなものを書くのか。ぬっと人間の存在の底に潜む化け物が出てくるような作品をいつか書くだらう。とにかく『蛙』には参りました。

次に優秀作に触れると、小石川彩さんの『LOVE 及び PEACE』は、はちゃめちやの乱調文体がそれなりに読ませた。友達の少年を、本田(馬鹿)、で通すところなどなかなかだ。爆発的勢いも良い。ただ、これだけしゃべりまくり暴れまくった最後が、「あたし」と「佐藤裕貴」の関係だけに縮まって終わった。途中まで、でっかくて面白かったのに。

さて今回一番の奇妙・難解・ナンセンス・実験作は塩原拓人さんの『いつかより穏やかな発酵』だ。空中楼阁という言葉がある。もとより地に建つはずのない建物を建てようとするのだから、物理の法則に反している。建つはずがない。しかし文学、芸術では建つのである。ただそれにもやはり反物理の法則というか、何か決まり事はあるのである。塩原さんはそれを見つけねばならない。しかしこのチーズやサンドイッチ未遂なるものたちには、そこはかたない発酵臭が漂うよう。構成では前半があまりに飛びすぎた印象だった。

塩川幸さんの『胎内で孵化する卵』は、大変な力作で長編である。これを長い日数をかけて書きながら、作者の中で主人公や登場人物たちは生きて動き出し、作者に語りかけてきたらどうか。フォークの先に突き刺したチーズのかけらでも、主人公の役を与えれば擬人化して動き出す。創作とはそういうものだ。しかしこの作品の人物たちはまだ文字の海の中にいて、体を持たない気がする。一切の観念用語を取り去ること。後にどのくらいの実質的言葉が残るか、やってみてほしい。

小林慎也(本学教授 ジャーナリスト)

言葉と自然への信頼感

今回集まった文芸誌を見て感じたのは、地域差だった。今年だけの傾向ではないのだが、東京や関西の大都市圏の高校からの応募が少なく、むしろ東北、関東や九州などのものに見るべきものが多かった。いずれも、散文韻文のバランス、多彩多様な企画、そして量感があり、行き届いた作りの雑誌である。逆に、思い切った冒険、挑戦が影をひそめたのが、少し気にかかる。

もう一つ、小説に限って言えば、現実、とくに自然環境を背景に描いていた作品が目立った。クロアゲハ、蛙、蛭、カラス、ヒマワリ、トマト、夕日などなど。それらのイメージが作品世界の中で、ある意味を託されている。作者の住む地域環境とも重なるのか。

ただ、自然には敏感なはずの短歌、俳句の作品は従来より多かったのに、全体にレベルがもう一つの感じだったのは残念。

最後に、作品で使われたことばについて。一言で言えば、こなれていて、磨かれていて、読みやすかった。若者特有の口語体を含め、大人にも分かる記述、描写で書かれていて、日本語への信頼感を見てとれた。ことばの伝統がしっかり受け継がれている。

北川 透(本学教授 詩人 文芸評論家)

世界への盲目の手応え

わたしたちはいつも与えられた眼鏡、仕組まれた窓を通してしか世界を見ていない。しかし、小説や詩を書くということは、そういう眼鏡や窓を通して見ている世界が、とつぜん、信用できなくなって、盲目になってしまうことではないのか。そこで世界を素手で触ろうとする。たとえば、目隠しされて何が入っているか分からない、不気味な壺の中に手を突っ込むようなものである。そこでにゆるにゆるした正体不明なものに触り、それが何であるかを言い当てようとする時の、身体の中を熱いものや冷たいものが走っていく、あの怖いような、気持ちの悪いような感じ。でも、確かに何かを掴まえて、それを名づけようとする、あるいは名づけることができた時の不安な、しかし嬉しい気持ちもないわけでない。

きっと、そんな経験をしながら書いているだろうな、と思われる小説を今回は何篇も読むことができた。最優秀作となった「街灯」「蛙」、それと優秀作の中の「いつかより穏やかな発酵」の3篇は、わたしにとって、特にその点で印象の強いものだった。

今回の高校文芸誌は総体的に、小説に圧倒的な印象があり、現代詩にいつものような目立つ作品が少なかった。その中で、「溼」復刊第2号の加賀谷理沙さんの、作品群からは、先の小説と同じ印象を受けた。ただ、1篇だけ取り出したときの力の弱さが、残念だった。

宮崎勝弘(本学教授 ジャーナリスト)

最深部まで掘り下げよ

この元気のよさは何なのだろう？ 堆く積まれた応募作を前に、そう思った。読み進めていくうち、この元気のなさは何なのだろう？ と。愛人や離婚話が出てきても構わない。家庭内暴力や生きにくさが採り上げるのも社会相を映し出して当然だ。表現も技巧も優れた作品が少なくない。幼稚と若さは紙一重。軽いからよくなくて重いからいいというのでは、ない。その意味で明らかに水準は上がった。

しかし、「書く」動機や構えの最深部にあるべき「伝えたいこと」が不鮮明なのはどうしたことか。審査することは審査されることを承知の上、新しい感性や想像力と出会いたくて臨んだ選考だが、柄にもなく考え込んでしまった。小説だから、主題の分析や考察ということにはならない。だが、何が伝えたいか、その「何か」を掘り下げ、自分のものにしてほしい。

「街灯」は、主人公と死んだ弟の友人との会話が続く話の運びに無理がなく、柔らかい言葉が効果をあげている。「忘れ物預かり所」は、どこか大人びて、それでいて若者ならではの想像力が、次々と展開する場面への期待感をつくり出す。楽しく読んだ。「蛙」は読後感に何ともいえない手応えがあり、筆者の可能性を感じさせた。このほか、「井戸浚い」「焼却炉にクロアゲハチョウ」がよかった。

鍋島幹夫(本学准教授 詩人)

想像の岸辺

自分の思い通りにならないことで人を刺す。彼らは流血の痕跡が消えてもなお流れ続ける時間に思いを馳せることができない人であったり、憎悪する対岸に身を置いて、小さい自分自身の姿を眺め返すことのできない者たちのことではないか。今回応募の詩作品を読みながらそんなことを考えた。

というのも、作品に底流するものを大雑把に捉えれば、人とのつながりということができるからである。ここに今を生きる若い人たちの現在がある。自らの立つ位置と彼らにとっては問いや謎である対岸との視線の往復の痕跡が、詩という言葉の葛藤に表れている。

たとえば「星空カップリング」。友達関係を結ぶものが修正液という逆説は、人との関係に初めから用意される距離感や別れの予感に対する恐れを言い得て、うなずかせる。

また、「世界の終わり」では、「またね」が迷子になっている の1行のように、日常会話の常套句を主語として使いながら、人や世界との距離感や存在感を繰り返さざぐっている様子が印象に残った。

詩や文芸をとおして対岸を直視し、自らの居場所や来るべき時と対話している高校生に、今回もたのもしさを感じた。

島田裕子(本学教授 歌人)

短詩型へのチャレンジを

今回、短歌・俳句といった定型詩にはずば抜けた作品がなかった。

その中で、堀田隆大君の「実験工房短歌集」(『帆聲』第六一号)は、寺山修司を読み込み取り入れることから始まり、「ツバメらは働き疲れて巣にもぐりフィリピン行きの夢を見ている」という社会的広がりのある歌や「世界地図の中心に置くレモンの実 想像力の爆弾として」など荒削りであるが印象深かった。また、加賀谷理沙さんは、「とまと食う川をザックと渡るよに」等の俳句や、短歌にも優れた作品を詠んでいる。が、もっとも充実していたのは詩で、受賞作の「星空カップリング」はことばの選び方の新鮮さと調べへのこだわりがよかった。俳句では、大谷晃仁君の「春愁」が、「もの言はぬティッシュ配りや暮の秋」等味わい深い作品をものしている。『いさらあ』の短歌会は年々レベルが上がっている。

最後に、塚本邦雄風の優れた短歌群があったが、文芸誌ではなく個人歌集であったので本コンクールの応募規定に合わず残念であった。

村中李衣(本学教授 児童文学作家)

らしさなんてなにさ、ってことで

小説部門で受賞された、加藤晶さんの「街灯」は、弟の死、そして親友の死を、観念でも感傷でもなく、作者独自の容器に移し取り、有無を言わずぱちんと蓋を閉めた。

なせなるさんの「蛙」は、いじめの進行を、正義にも絶望にも寄りかからず、ひたすら水槽の水の澱みを教室全体あるいは世界全体に澱みにまで滲ませていった。この「らしさ」をのっけから鼻にもかけない不敵な書きっぷりに、度肝を抜かれました。「蛙」は、作品の構造を解剖したら、蛙以上にとんでもなさげ飛び出てきます。クラスメートや教師がなぜ登場しないのかとか、途中から登場人物のキャラクターが変わってしまうとか……でも、そういう構成の破綻以上に、今ある世界の破綻のきざしが、ことばによって読者の皮膚感覚にまで届いたことを評価しました。

というわけで、みなさん、ここでの講評なんかも、無視されるのは、さびしいけれど、講評に縛られて、それらしい作品に収まってしまっただめですよ。ハードルは、書くたびにきれいに跳び越すのでなく、全部蹴倒して、最高のゴールをめざしてください。

新しいことにチャレンジする精神

同じ学校の文芸誌を何年も見続けているためか、文芸誌を拝見していて今回は刺激がそれほど感じられませんでした。特に低調だと感じたのは企画です。どこかで見たとある企画、先輩たちの発想をそのまま踏襲した企画が目立ちました。不思議なもので、以前と同じことをやろうとすると、決して悪い出来栄ではないのに今ひとつに感じられることが少なくありません。新しいことにチャレンジする精神。それこそが、自分たちの文芸誌に読み手を引きつける最大の力なのです。ぜひとも新しいことに果敢にチャレンジしてってください。

ただその分、文芸誌においてもっとも重要な創作のほうに力が入っていた、ともいえます。『いさらみ』は授賞常連雑誌ですが、部活動および雑誌製作が人間修行の場となっている姿はいつ見ても感動的です。『響』はチームワークのよさ、『瑞木』は創意工夫と作品の質を評価しました。全体として、東北勢と福岡県のレベルの高さ、山口県の奮闘が印象的でした。

梅光学院大学文芸部 学生代表

『鳳翔』第四号を推薦します

全国から送られてきた数多くの文芸誌を初めて見たとき、その数の多さに驚いてしまいました。どの1冊も個性的で、それぞれ書いた人の思いが込められた非常に魅力的な作品ばかりだと思います。幅広いジャンルの小説や詩、短歌や俳句など様々なものを読ませていただきました。

短い小説でも読む人を惹きつけ、感動させるものを秘めている作品もありました。中には30ページを優に超える長編もあり、その表現力に圧倒されることもあったほどです。

しかし、文芸誌はたくさんの人に読んでもらうものです。ただ自分がこう書きたい、こうしたいという思いだけでは成立しません。読んでいる人が読みやすい、これも大切です。

送られてきた文芸誌のうち、目次がない、また見辛い、改行ミスや変換ミス、字が小さすぎて読み辛い、というものも目立ち、作品の素晴らしさを半減させてしまうことが多々あったのが、少し残念に感じました。

今回、私たちが選ばせていただいた文芸誌『鳳翔』第四号は、最もバランスが取れており、読みやすいと感じられた文芸誌でした。文章の表現などはまだ成長途上という印象もありますが、大きな可能性を感じられる作品たちです。今後の更なるご活躍を期待します。